

金色夜叉

上

尾崎紅葉作



緑 14-1
岩波文庫

こんじきやしや
金色夜叉 (上) [全2冊]

1939年4月3日 第1刷発行
2003年5月16日 改版第1刷発行
2005年7月25日 第3刷発行

作 者 おぎきこうよう
尾崎紅葉

発行者 山口昭男

発行所 株式会社 岩波書店
〒101-8002 東京都千代田区一ツ橋 2-5-5

案内 03-5210-4000 販売部 03-5210-4111
文庫編集部 03-5210-4051
<http://www.iwanami.co.jp/>

印刷・三陽社 カバー・精興社 製本・桂川製本

ISBN 4-00-310141-3

Printed in Japan

岩 波 文 庫

31-014-1

金 色 夜 叉

(上)

尾 崎 紅 葉 作



岩 波 書 店

目 次

金色夜叉前篇		五
中篇金色夜叉		九五
後編金色夜叉		一三三

金色夜叉前篇

第一章

未だ宵ながら松立てる門は一様に鎖籠めて、真直に長く東より西に横われる大道は掃きけるように物の影を留めず、いと寂しくも往來の絶えたるに、例ならず繁き車輪の輾は、或は忙しかりし、或は飲過ぎし年賀の帰來なるべく、疎に寄する獅子太鼓の遠響は、はや今日に尽きぬる三箇日を惜むが如く、その哀切に小き腸は断れぬべし。

元日快晴、二日快晴、三日快晴と誌されたる日記を讀して、この黄昏より冨は戦出でぬ。今は「風吹くな、なあ吹くな」と優しき声の宥むる者なきより、憤をも増したるように飾竹を吹靡けつつ、乾びたる葉を粗なげに鳴して、吼えては走行き、狂いては引返して、揉みに揉んで独り散々に騒げり。微曇りし空はこれがために眠を覚されたる気色にて、銀梨子地の如く無數の星を顕して、鋭く冪えたる光は寒気を発つかと想わしむるまでに、その薄明に曝さるる夜の街は殆ど氷らんとすなり。

人この裏に立ちて寥々冥々たる四望の間に、争か那の世間あり、社会あり、都あり、町あることを想得べき。九重の天、八際の地始めて渾沌の境を出でたりといえども、万物いまだ尽く化生せず、風は試に吹き、星は新に輝ける一大荒原の、何らの旨意も、秩序も、趣味もなくて、ただ濫に遡く横われるに過ぎざる哉。日の中はさながら沸くが如く楽み、謳い、酔い、戯れ、歎び、笑い、語り、興ぜし人々よ、彼らは儚くも夏果てし子子の形を斂めて、今はた何処に如何にして在るかを疑わざらんとするも難からずや。多時静なりし後、遙に拍子木の音は聞えぬ。その響の消ゆる頃忽ち一点の燈火は見え初めしが、揺々と町の尺頭を横截りて失せぬ。再び寒き風は寂しき星月夜を擅まに吹くのみなりけり。とある小路の湯屋は仕舞を急ぎて、廂間の下水口より噴出する湯気は一団の白き雲を舞立てて、心地悪き微温の四方に溢るるとともに、垢臭き悪気の盛に迸るに遭える綱引の車あり。勢いて角より曲り来にければ、避くべき遑無くてその中を駈抜けたり。

「うむ、臭い。」

車の上に声して行過ぎし跡には、葉巻の吸殻の捨てたるが赤く見えて煙れり。

「もう湯は抜けるのかな。」

「へい、松の内は早仕舞でございます。」

車夫しやふのかく答えし後は語絶ことばたえて、車は驀直まじぐらに走れり。紳士は二重外套にじゆうがいとうの袖を犇ひしと搔合かきあせて、獺かわうその衿皮えりかわの内に耳より深く面を埋めたり。灰色の毛皮の敷物の端を車の後に垂れて、横縞よこじまの華麗はなやかなる浮波織ふはおりの蔽膝ひざかけして、提灯ちようちんの徽章しるしはTの花文字はなもじを二個組合ふたつせたるなり。行き行きて車はこの小路の尽頭はすれを北に折れ、やや広き街に出でしを、僅わずかに走りてまた西に入り、その南側の半程なかほどに箕輪みのわと記したる軒燈のきうんづを掲げて、剡竹そぎだけを飾れる門構もんがまえの内に挽入ひきいれたり。玄関の障子に燈影ひかげの映しながら、格子は鎖固さしかためたるを、車夫は打叩うちたたきて、

「頼む、頼む。」

奥おくの方かたなる響動どよみの劇はげしきに紛れて、取合まぎわんともせざりければ、二人の車夫は声を合せて訪おもたい一つ、格子戸を連打つづけうちにすれば、やがて急足いそぎあしの音立てて人は出で来ぬ。

円鬘まるわけに結ゆいたる四十ばかりの小さく瘦やせて色白き女の、茶微塵ちやみじんの糸織いとおりの小袖に黒の奉書ほうしよ紬つむぎの紋付の羽織着たるは、この家の内儀ないぎなるべし。彼の忙しげに格子を啓あるを待ちて、紳士は優然と内に入らんとせしが、土間の一面に充滿みちみちたる履物の杖を立つべき地さえあらざるに遅ためらえるを、彼は虚すかさず勤篤まめやかに下立おりたちて、この敬うやまうべき賓まろうどのために辛くも一条の道を開けり。かくて紳士の脱捨ぬぎすてし駒下駄のみは独り障子の内に入られれたり。

(一)の二

箕輪みのわの奥は十畳の客間と八畳の中間とを打抜きて、広間の十個所に真鍮しんちゆうの燭台しよくだいを据え、五十目掛がけの蠟燭ろうそくは沖の漁火いさりびの如く燃えたるに、間まごとの天井に白銅鍍ニッケルめつきの空氣ランプを点ともしたれば、四辺あたりは真昼より明あきらかに、人顔まばゆも眩くらきまでに耀かがやき遍わたれり。三十人に余あまぬる若き男女は二分に輪作ふたわかれわづくりて、今を盛りと歌留多遊かるとあそびをするなりけり。蠟燭の焰ほのおと炭火の熱と多人數たにんずの熱蒸いせと混じたる一種の温氣うんきは殆ど凝こりて動かざる一間の内を、莢たばこの煙けぶりと燈火の油煙ゆえんとは互たがいに纏もつれて渦卷うずまきつつ立迷えり。込合こみあえる人々の面は皆赤うなりて、白粉おしろいの薄剥うすはげたるあり、髪かみの解はれたるあり、衣きぬの乱次しどなく着きつゝ頰ほおれたるあり。女は粧よそお飾りたれば、取乱とりみだしたるが特ことに著いちじるく見ゆるなり。男はシャツの腋わきの裂けたるも知らで胴衣ちよつきばかりになれるあり、羽織ぬを脱ぬぎて帯の解けたる尻つきたを突出つきたすもあり、十の指をば四よまで紙にて結ゆいたるもあり。さしも息苦しき温氣も、咽むせばさるる煙の渦も、皆狂きやうして知らざる如く、むしろ喜びて罵ののしり喚わめく声、笑顏わらいるる声、振合ねじあひ、踏破ふみく犇ひしめき、一斉いっせいに揚あぐる響動ひびきなど、絶間たえまなき騒動うちの中に狼藉ろうぜきとして戯たわれ遊ぶ為體ていは、三綱五常さんかうごじやうも糸瓜へちまの皮と地に塗まびびれて、ただこれ修羅道しゆらどうを打覆ぶつくりかえしたるばかりなり。

海上風波の難に遭える時、若干の油を取りて航路に澆げば、浪は奇くも忽ち鎮りて、船は九死を出ずべしとよ。今この如何ともすべからざる乱脈の座中をば、その油の勢力をもて支配せる女王あり。猛びに猛ぶ男たちの心もその人の前には和ぎて、終に崇拜せざるはあらず。女たちは皆猜みつつも畏を懷けり。中の間なる団欒の柱側に座を占めて、重げに戴ける夜会結に淡紫のリボン飾して、小豆鼠の縮緬の羽織を着たるが、人の打騒ぐを興あるように涼き目を睜りて、躬は淑かに引繕える娘あり。粧飾より相貌まで水際立ちて、凡ならず媚を含めるは、色を売るものの仮の姿したるにはあらずやと、始めて彼を見るものは皆疑えり。一番の勝負の果てぬ間に、宮という名は普く知られぬ。

娘も数多いたり。醜きは、子守の借着したるか、茶番の姫君の戸惑せるかと覺しきもあれど、中には二十人並、五十人並優れたるもありき。服装は宮より数等立派なるは数多あり。彼はその点にては中の位に過ぎず。貴族院議員の愛娘とて、最も不器量を極めて遺憾なしと見えたるが、最も綺羅を飾りて、その起肩に紋御召の三枚襲を被ぎて、帯は紫根の七糸に百合の折枝を縫金の盛上にしたる、人々これがために目も眩れ、心も消えて眉を皺めぬ。この外種々色々の絢爛なる中に立交らいては、宮の装は纔に暁の星の光を保つに過ぎざれども、彼の色の白さは如何なる美しき染色をも奪いて、彼の整え

る面は如何なる麗わしき織物よりも文章ありて、醜き人たちは如何に着飾らんとその醜きを蔽う能わざるが如く、彼は如何に飾らざるもその美しきを害せざるなり。

袋棚と障子との片隅に手炉を囲みて、蜜柑を剥きつつ語う男の一個は、彼の横顔を恍惚と遙に見入れたりしが、遂に思堪えざらんように呻き出せり。

「好い、好い、全く好い！ 馬士にも衣裳と謂うけれど、美しいのは衣裳には及ばんね。物それ自らが美しいのだから、着物などは如何でもいい、実は何も着ておらんでもいい。」

「裸体ならなお結構だ！」

この強き合槌撃つは、美術学校の学生なり。

綱曳にて駈着けし紳士はしばらく休息の後内儀に導かれて入来りつ。その後には、今まで居間に潜みたりし主の箕輪亮輔も附添いたり。席上は入乱れて、ここを先途と激しき勝負の最中なれば、彼らの来れるに心着きしは稀なりけれど、片隅に物語れる二人は逸早く目を側めて紳士の風采を視たり。

広間の燈影は入口に立てる三人の姿を鮮かに照せり。色白の小さき内儀の口は瘡のために引歪みて、その夫の額際より赭禿げたる頭顱は滑かに光れり。妻は尋常より小きに、

夫は勝れたる大兵肥満にて、彼の常に心遣ありげの面色なるに引替えて、生きながら布袋を見る如き福相したり。

紳士は年齒二十六、七なるべく、長高く、好きほどに肥えて、色は玉のようなるに頬の辺には薄紅を帯びて、額厚く、口大きく、腮は左右に蔓りて、面積の広き顔はやや正方形を成せり。緩く波打てる髪を左の小鬢より一文字に撫付けて、少しは油を塗ったり。濃からぬ口髭を生して、小からぬ鼻に金縁の目鏡を挟み、五紋の黒塩瀬の羽織に華紋織の小袖を裾長に着做したるが、六寸の七糸帯に金鏈子を垂れつつ、大様に面を挙げて座中を胸したる容は、実に光を發つらんように四辺を払いて見えぬ。この団樂の中に彼の如く色白く、身奇麗に、しかも美々しく装いたるはあらざるなり。

「何だ、彼は？」

例の二人の一個はさも憎さげに呟けり。

「可厭な奴！」

唾吐くように言いて学生は故と面を背けつ。

「お俊や、ちよいと。」と内儀は群集の中よりその娘を手招きぬ。

お俊は両親の紳士を伴えるを見るより、慌忙しく起ちて来れるが、顔好くはあらねど

愛嬌あいきょう深く、いと善く父に肖にたり。高島田に結ゆいて、肉色縮緬にくいろちりめんの羽織つまに撮つまみたるほどの肩揚かたあげしたり。顔を赧あかめつつ紳士の前に跪ひざますきて、慇懃いんぎんに頭を低かしらさぐれば、彼はわずかに小腰ここしを屈かがめしのみ。

「どうぞ此方こちらへ。」

娘は案内せんと待構えけれど、紳士はさして好ましからぬように頷うなずけり。母は歪ゆがめる口を怪しげに動うごして、

「あの、見事な、まあ、御年玉を御戴おいただきだよ。」

お俊は再び頭を低かしらさげぬ。紳士は笑を含みて目礼せり。

「さあ、まあ、いらつしやいまし。」

主あるじの勤しんむる傍そばより、妻はお俊を促うながして、お俊は紳士を案内あんないして、客間の床柱とこばしらの前なる火鉢あか在ある方に伴かたれぬ。妻は其処そこまで介添かいぞえに附つきたり。二人は家内かないの紳士を遇あつふことゝの極めて鄭重ていちょうなるを訝いぶりて、彼の行くより座るまで一挙一動も見脱みのさざりけり。その行く時彼の姿はあだかも左の半面を見せて、団欒だんらんの間を過あぎたりしが、無名指むめいしに輝ける物の凡ただならず強き光は燈火とうしに照添てりそいて、殆ど正しく見る能わざるまでに眼を射られたるに呆あきれ惑まどえり。天上の最も明なる星は我手に在りと言わまほしげに、紳士は彼らのいまだかつ

て見ざりし大^{おおき}さの金剛^{ダイヤモンド}石を飾れる黄金^{きん}の指環^{ゆびわ}を穿^はめたるなり。

お俊は骨牌^{かるた}の席に復^かえると倅^{ひと}しく、密^{ひそか}に隣の娘の膝を衝^つきて口早^{くさや}に囁^{ささや}きぬ。彼は忙^{いそが}々しく顔を擡^{もた}げて紳士^{かた}の方を見たりしが、その人よりはその指に耀^{かがや}く物の異常なるに駭^{おどろ}かされたる体^{てい}にて、

「まあ、あの指環は！　ちよいと、金剛^{ダイヤモンド}石？」

「そうよ。」

「大きいのねえ。」

「三百円だって。」

お俊の説明を聞きて彼は漫^{そぞろ}に身毛^{みのけ}の弥立^{よだ}つを覚えつつ、

「まあ！　好^こいのねえ。」

鰯^{ごまめ}の目ほどの真珠を附けたる指環をだに、この幾^{いくとせ}歳か念^{ねん}懸^がくれどもいまだ容易に許されざる娘の胸は、忽ちある事を思い浮べて攻鼓^{せめつづみ}の如く轟^{とどろ}けり。彼は惘^{ぼう}然^{ぜん}として殆^{ほとん}ど我を失^まえる間に、電光の如く隣より伸^{のび}来^{きた}れる猿臂^{えんび}は鼻の前なる一枚の骨牌^{かるた}を引攪^{ひきさら}えば、

「あら、貴方^{あなた}どうしたのよ。」

お俊は苛^{いらだ}立ちて彼の横膝を続^つけさまに拊^はきぬ。

「よくつてよ、よくつてよ、以来これからもうよくつてよ。」

彼は始めて空想の夢を覚して、及ばざる身の分ぶんを諦あきらめたりけれども、一旦いったん金剛石ダイヤモンドの強き光に焼かれたる心は幾分の知覚を失いけんようにて、さしも目覚めざましかりける手腕てなみの程も見る見る漸ようやく四途乱しどろになりて、彼は敢無あえなくもこの時よりお俊のために頼み難がたき味方となれり。

かくして彼より此これに伝え、甲より乙に通じて、

「金剛石ダイヤモンド！」

「うむ、金剛石だ。」

「金剛石??」

「なるほど金剛石！」

「まあ、金剛石よ。」

「あれが金剛石？」

「見給え、金剛石。」

「あら、まあ金剛石??」

「可感すばらしい金剛石。」

「可^{おそろし}恐^{おそ}い光るのね、金剛石。」

「三百円の金剛石。」

瞬^{またた}く間に三十余人は相呼^{あひよ}び相応^{あひおう}じて紳士の富を謳^{うた}えり。彼は人々の更互^{かたみがわり}におのれの方^{かた}を眺^{なが}むるを見て、その手に形好^{かたちよ}く葉卷^{シガア}を持たせて、右手を袖口に差入れ、少し懈^{たゆ}げに床^{とこ}柱^{ばしら}に靠^{もた}れて、目鏡^{めがね}の下より下界を見遍^{みわた}すらんように目配^{めくばり}していたり。

かかる目印ある人の名は誰しも問わであるべきにあらず、洩^もれしはお俊の口よりなるべし。彼は富山唯繼^{とみやまだつぐ}とて、一代分限^{いちだいぶん}ながら下谷区に聞ゆる資産家の家督^{かどく}なり。同じ区なる富山銀行はその父の私設する所にして、市会議員の中^{うち}にも富山重平^{じゅうへい}は見出さるべし。宮^{みや}の名の男^{おとこ}の方に持囃^{もてはや}さるる如く、富山^{とみやま}と知れたる彼の名は直^{ただち}に女の口々に誦^{ずん}ぜられぬ。あわれ一度^{ひとたび}はこの紳士と組み、世に愛^{めで}たき宝石に咫^し尺^{せき}するの栄を得ばや、と彼らの心々に冀^{こいねが}わざるは希^{まれ}なりき。人もし彼に咫^し尺^{せき}するの栄を得ば、ただにその目の類^{たぐい}なく楽^{たのし}さるるのみならず、その鼻までも堇花^{フイオレット}の多く嗅^かぐべからざる異香^{いきかう}に薰^{くん}ぜらるるの幸^{さいわい}を受^うくべきなり。

男^{おの}たちは自^{おの}から荒^{すさ}められて、女^をの挙^{こぞ}りて金剛石に心牽^{こころひか}さるる気色^{けしき}なるを、あるいは妬^{ねた}く、あるいは浅^あましき、多少の興^{きよう}を冷^ささるはあらざりけり。独^ひり宮^{みや}のみは騒^{さわ}げる体^{てい}も